

幼児は皆漢字が大好き

先日、栃木市に在る「さくら保育園」(荒川銀子園長)で公開保育が行はれ、私は記念講演に行ったついでに零歳児教室を主に見学した。入園してすでに七か月を経過してゐたので、ほとんどの子が一歳児になってゐて、よちよちと歩き回ってゐた。

こんな幼児たちが、自分の名前を書いた漢字カードを、たくさんの漢字カードの中からちゃんと見付け出すことが出来るのである。友だちの名前のカードと一緒に床の上にはら撒かれてゐるたくさんのカードの中から、自分の名前のカードを見付け出さうと、真剣に見詰める幼児たちの姿には、見学者たちは皆、齊しく感動させられてゐたやうだった。自分の名前をまだ声に出して言ふことは出来ないけれども、自分の名前を書いたカードはさうでないカードと見分けがちゃんと付くのである。漢字の見分けが付くのである。

これは、毎朝、子供の名前を書いたカードを見せながら、その子の名を呼んでやってゐるその結果なのである。かういふ事を毎日続けてやってみれば、子供は自然と自分の名前を表した漢字を覚え、自分のものと他のものとの区別が立派につくやうになるのである。

このやうに、零歳児から漢字を使って行ふ保育は、今、次第に広まり

つゝある。公開保育も、すでに九州福岡市の「屋形原保育園」(木原フミエ園長)、「御幸保育園」(加藤政喜園長)、茨城県岩井市の「あかつき保育園」(佐藤千枝子園長)などが行ってゐて、私はそのいずれも訪問してこの目で直接観てゐるが、誰も見学して感嘆し、感激するのは、零歳児教室の子供たちの漢字カードに対する反応の強いことである。

赤ちゃんは、生後八か月頃から、カタコトを言ひ始める。空腹になると、「ウンマ」とか「マンマ」といふやうなカタコトで母親に訴へることが出来るやうになるものである。このやうな時期になれば、赤ちゃんは“漢字カード”に興味を示し、そのカードを繰返し読んでやれば、その漢字を理解することが出来る、といふ事がよく判った。

例へば、“目”といふ漢字カードを見せて「め、め、め、……」と言ひ、続いて自分の目を指さして「め、め、め……」と言ひ、これを繰返してやるのである。そして、これを毎日、根気よく繰返してやれば、赤ちゃんも真似して、“目”といふ漢字カードを見れば、自分の目を指さすやうになるのである。

零歳児の赤ちゃんに漢字を教へてゐる前記保育園の保母さんたちが、口をそろへたやうに言ふ事は、「赤ちゃんは、泣いて機嫌が悪いやうな時でも、漢字カードを見せて読んでやると、たいいてい機嫌を直してカードを見詰める」といふ事である。

私はこの事実から、赤ちゃんは「生れつき漢字が好きなのだ」と思ふ。漢字に興味を有つやうに生れついてゐるのに違ひない。言葉に関心を有つやうに生れついてゐるのと同じに、「目で見える言葉」の漢字にも関心を有つのだと思ふ。

あとでその理由を説明するけれども、「漢字は言葉よりも覚え易い」ものなのである。だから、カタコトが言へるやうになった赤ちゃんなら、誰でも漢字は容易に覚えることが出来るはずである。だから、生後八か月になったら、漢字カードを作って、漢字と一緒に言葉を掛けてやれば、言葉を覚えるより先に漢字を覚え、その漢字が手掛りで言葉が普通より早く覚えられるはずである。

大脳生理学の権威、故・時実利彦博士は、「生後の三年間が一生のうちで最も吸収力が旺盛で、記憶力が強い。三歳を過ぎれば、記憶力は年ごとに低下して行く」とおっしゃってゐた。それは、私の指導体験に照しても間違ひないことである。だから、漢字は小学校に入学するまでの間に覚えさせなければいけない事なのである。